

浄信寺通信

平成22年夏号

名古屋市中村区名駅五丁目二〇番三
宗教法人浄信寺収益事業部羽塚孝和
TEL (〇五二) 五六一一七三六
頒布価格年 千三百円
(檀信徒会費)

初めてのインド

仏教遺跡の旅

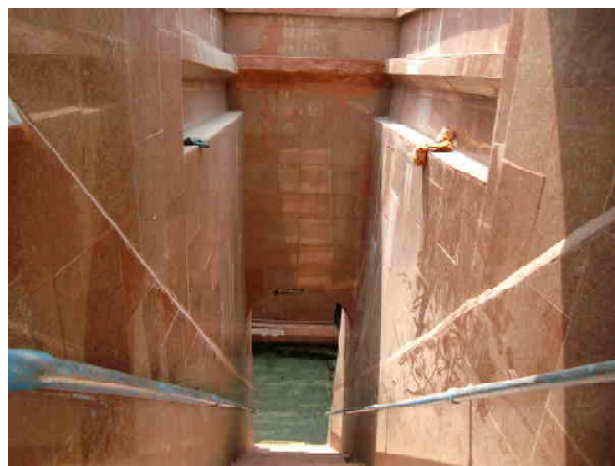


『ガラム・パーニー』 ヒンドゥー語では『熱い水』と言われる温泉の有るヒンドゥー寺院

二〇一〇年三月二十四日早朝、初めてのインドのお釈迦さまの遺跡を尋ねる九日間の旅行に行った。中継地のタイの首都バンコックで、反政府

デモが行われており無事行けるのか心配していたが、その当時はまだデモも流血の惨事にはなっていなかった。

バンコックの空港近くのホテルで一泊して、翌朝インドのガヤに到着。到着時の気温四十五度(湿度がないので、日本の暑さではない)。かつてマガダ国の首都で、最大の都として文化的・経済的にも栄えていた王舎城のあったラージギルが、インド仏遺跡の最初の訪問地であった。



温泉への下る階段の手すり奥が湯船です

お釈迦様は東北インドで活躍された。当時のマガダ国で舍利弗、目連など多くの弟子に恵まれた。そのマガダ国の国王だったビンピサーラ王の篤い帰依を受けた。古代インドで強大な権力を保持した国王の帰依を受けたことは、仏教が発展する大きな礎となったのである。

ラージギルは、霊鷲山など小高い五山に囲まれ、お釈迦様の当時は、周囲四〇キロの城壁で囲まれており、今でも遺された城壁の一部が往時を偲ばせている。ここにあった竹林精舎や霊鷲山などで多く説法をなされた。



一番下のカーストの人達用の浴槽です
撮影禁止でしたので写真はネット引用

平和公園墓参のご案内

日時： 8月12日(木)
13日(金)

午前8時頃～午後1時頃

有名なガンジス川での沐浴風景 もくよく



インドの温泉へ入浴

最初に訪れたこのラージギルには、カルデラ地帯で温泉があった。インドで温泉に入ると言う事など想像していなかった。露天風呂で、男女混浴と言っても水着などを着て入浴する温泉で、インドでの食事はどうなものとのかの危惧をよそに、日本食とインド料理がインド最初の夕食であった。食後に希望者だけ、ライフフル銃を持った数人のガードマンの護衛でラージギル温泉へ、温泉の周りには、日本で言

う湯治場の雰囲気があり、簡易宿泊や、夜店が並んでいた。温泉は、小高い丘の上の、小さなヒンドゥ寺院の院内にあった。当初の話では、温泉の浴槽が工事中で入れないかも知れないとの話でしたが、仏蹟ツアーを長年手がけてきたトラベル・サライの中村さんの機転で、鍵を開けてもらい、特別に入浴出来る幸運に恵まれた。四方を石で囲まれた、急勾配の階段を二十数段下りると、浴槽があり、砂地の底からは、心地よい熱湯が湧き出しており、貸し切り状態の温泉の湯は透明で、天井はなく、真上を眺めれば、月が皓々と照りそそいでいた。普段は、イモを洗うほどの入浴者で賑わっているとの事。

翌日、改めてこの温泉のあるヒンドゥ寺院に参拝した。我々が昨日入浴した浴槽は、温泉の最上階の場所、湯が湧き出して来る湯元。その浴槽のお湯が、滝が流れ出すように、又次の滝へ、そしてその次の滝へと流れ落ちるような浴槽が上から順番に並んでいた。入浴出来る浴槽は、カーストで厳格に区別されていると聞かされ、インドでの最初のカルチャー・

ショックを受けたのである。

我々が入浴した浴槽は、インドでのカーストの最高位の宗教儀礼を専門とするバラモンの人達しか入浴できない場所だったそうです。外国人は、このバラモン階級の人が入る温泉に入る事が出来る。最下級のシュードラの入る温泉は、上部の浴槽から順に流れ下ってきた湯を溜めた露天風呂でした。洗濯をしている脇で入浴する小さい子どもを連れとお母さんが、健気に子どもを洗っている姿を遠くから見て、改めて現代インドが直面する現実をかいま見た気がした。

現地のガイドのバンシー氏に、「何で身分証明書の提示を求められる訳でもないのに、どのカーストに属する事が分かるの？」

と素朴な疑問をぶつけた。彼曰く、それは、本人の顔つきを見れば分かるとのこと。外国人の小生からは、到底区別がつかない、小さな女の子なんか可愛くて、皆同じにしか見えないのだが、現地の人には、

判別が出来るようだ。

旅行中の移動は、インドの国産の大型バス。冷房が入ってはいないが、道路事情などで、快適なドライブとは言いがたく一日何百キロも移動しなければならなかった。車窓からは、広大なインドの田園風景が延々と続いていた。小さな集落を通ると日本と言う縁日やお祭りの露天商のような店が並んでおり、痩せた牛がいたるところにいる。学校へは、ごく限られた子どもしか行かない。子供が、畑仕事を手伝っている光景を眼にする。住まいは、お釈迦さんの時代と、おそらく変化のない、日干し煉瓦に藁で家根を葺いた小さな家。電気もガスも無い。ロウソクとランプの生活。跣足で歩いている人も珍しくないそんな現風景がいたりところにあった。

しかし、近代化の波は、インドのこうした地域にも訪れ、空き地には、不燃の塵芥が散らばっていた。インドの大会で的一般事務職の月収が二万円ぐらいと聞き、我々外国の旅行者が泊まるホテルは、インド人の月収ぐらいの値段で泊



霊鷲山の頂上での旅行参加者全員での勤行

まっている。そのギャップの大きさに、驚いたのである。インドの人口は八億とも十二億人とも言われている、その食料を賄うために、広大な畑には、小麦などが栽培されていた。

霊鷲山へ登る りようじゅせん

翌朝ホテルでの朝食前、まだ薄暗いうちに、ラージギルの中心部から六キロほど南のグリドラ・クータ山へ行く。経典では霊鷲山（りようじゅせん）又は耆闍崛山（ぎしやくつせん）とある。釈尊はここに逗留され、数々の経典の舞台となっている場所である。

例えば、法華経や無量寿経や観無量寿経の冒頭部には、

『私（阿難）^{あなん}はこのように聞きました。ある時、お釈迦さまは王舎城という国にある耆闍崛山（ぎしやくつせん、霊鷲山のこと）に千二百五十人の修行者たち、三万二千人の諸菩薩とともにおられた・・』と書かれている。

ビンビサーラ王は、お釈迦さまの説法を聞くために、麓^{むす}から山頂まで石畳を敷きつめ階段を作った。いまもビンビサーラ・ロードと親しまれている道を歩いて、霊鷲山（りようじゅせん）に登り、ご来光を仰ぎ参拝。この時も、警察官二人の護衛付きでした。この霊鷲山も、昔からの遺跡ではなく、インドでの仏教の衰亡以来ジャングルに埋もれ、長い間その所在が不明だったのを明治三十六年の一月に西本願寺の大谷探検隊が、ジャングルの中に、発見して、霊鷲山と断定したのである。

こうして、我々二十数人のインド仏蹟の旅は始まったのである。いずれ又機会があれば述べたい。

参考資料：【カースト制度】の簡単な解説

お釈迦さまの時代から、2500年。いまだに、インドは、カースト制という世界最大の差別の大系との、気の遠くなるような、果てしのない戦いを強いられている。（インド憲法は、カースト制度の打破をうたい、平等原則を目指している。）

インドのカースト制度には、宗教儀礼を専門とするバラモン（司祭）を最上位に、軍事・政治をつかさどるクシャトリア（王族、武士）、商工業活動に従事するヴァイシャ（平民）、そしてその下には被支配民族のシュードラ（奴隷）という4つの階級が有ると言われている。

実際には、これは【ヴァルナ】と呼ばれるもので、それに【ジャーティ（生まれを同じくする集団）】と呼ばれる伝統的な職業別細分化された集団があり、例えば、最近ではインドでは余り見かけなくなったと言われている蛇使いの集団（サペラ）や洗濯夫の集団（ドビー）など、その数は2

000とも3000とも言われている。

【ジャーティ】は、地域社会の中にあって、独自の機能を果たしている。例えば自治機能を持ち、他カーストの者と一緒に食事をしないなど固有の諸規則を厳格に守り、固有の職業を先祖代々世襲する集団である。同じ【ジャーティ】でしか結婚できない制度が、現在でも継承されており、異カースト（異宗教）間の結婚はごく稀だと言われている。

この【ジャーティ】と、前述の【ヴァルナ】とは、異なった制度だが、現実には両制度は密接に結合されている。各【ジャーティ】、四つの【ヴァルナ】のいずれかに属している。しかし、実際にはこれらの制度に入ることのできないアウトカースト【不可触民・アチュート・ダリット】も存在するため、インドの社会は大きく五つに区分されていると言われている。

別院でお待ち受け法要勤修

二〇一〇年六月二十六日(土)あいにくの小雨模様の天候。名古屋東別院本堂で、住職の属するスぺー・サラナン主催の、法然上人八〇〇回・親鸞聖人七五〇回の御遠忌お待ち受け法要が、勤修された。福井県から熱心なご門徒の団体参拝をはじめ、約六〇〇名ものご参詣を頂き、参加の方が少ないのではとの危惧をよそに、多く方にご参詣頂いて感謝いたしております。



慈光寺伊藤孝道住職と、二人かたり節談説教

こうした会が開催できたのは、ひとえに昨年の自坊の報恩講でお話頂いた、東京大学の伊東乾先生^{いとう けん}の助言と指導があったからと思っております。本堂の特性とは、真宗がなぜ伝播したのか？参加者全員が感動を共有できる法会は何か？斬新な発想と試行錯誤！周到な準備をしたとは言いがたいところも有ったかも知れませんが、既存の発想からのお待ち受け法要ではない、新しい形の法要のひな形出来たのではないのかと、自負いたしております。

当日の第一部は、当寺の報恩講にも、毎年ご参勤されている慈光寺住職の伊藤孝道師との二人での、ふし語り説教(節談説教)として、御遠忌の意味や、ご和讃の解説を交えながら、時には笑いを入れての「天竺問答」^{てんじくもんどう}。そして、親鸞聖人がつくられた数多いご和讃の中から五首を、親鸞聖人の時代に謡われた「今様(いまよう)」の節譜^{ふし}の流れをくむお能の謡いで、観世

流のシテ方の青木涼子氏が、笙と龍笛^{りゅうふえ}の音の伴奏で謡ってもらいました。七五調の和讃を能の謡いで聞くのも初めての体験でした。

第二部は、一ヶ月前に急に決まった稚児行列と散華。それに教区僧侶有志による、音木の二人打ちにより阿弥陀経での勤行。

第三部は、今回の法要の目玉で、何故東西本願寺に能舞台が現存しているのか？その謎に対する答えとして、信長と争ったあの石山本願寺の本堂に、実は能舞台があり、お能(当時は猿楽^{さるがく}と言っていた)が、演じられた。その再現を彷彿(ほうふ)つさせる本堂中央で、雅楽の伴奏での能の仕舞^{しまい}「敦盛」の「中の舞」の披露。雅楽の伴奏での仕舞も恐らく初めての経験ではなかったのか。

最後は、「清浄楽正信偈」^{しょうじょうがくしょうしんげ}と題して雅楽伴奏で全員で同朋奉賛の唱和と、同じく雅楽の伴奏での『恩徳讃』。まったく新しい平座での形で法要に、僧俗一体となった感動と、驚きを共有できた法会になったのではなからうかと、個人的には思っています。



600名の参加者全員での「清浄楽正信偈」唱和

報 恩 講 勤 修

平成21年11月9日(火)

午前10:00~

勤行・説教・おとき

住職の法話

内容は???

聴いてのお楽しみに!